

(8) ビワ

主要病害虫別防除方法

病害虫名 (病原体)	農薬によらない防除	農薬による防除
がんしゅ病 (細菌)	①防風垣、防風網を設置する。 ②無病樹を植え込む。 ③罹病枝を除去する。 ④9月下旬に枝幹部病斑を削る。 ⑤果実に丁寧に袋掛けする。 【参考事項】 病原細菌は病斑部から水滴によって運ばれる。 袋かけ、収穫、芽かき、剪定などによる傷から感染し、芽、葉、果実、枝、幹などで発病する。その部位に特徴のある病斑を形成する。 ナシヒメシンクイが食入するとその傷口から発病し、病斑を拡大させる。 芽枯れ症状は茂木系統に、枝幹の発病は田中系統に多い。	①収穫、剪定、台風襲来後など傷がつきやすい時期に農薬を散布する。 (例) カスガマイシン・銅水和剤 (カスミンボルドー、銅パースン水和剤) (幼果期まで) 銅水和剤 (コサイド 3000、Zボルドー、ICボルドー66D)
灰斑病 (<i>Pestalotiopsis</i>)	①樹勢の強化に努める。 ②敷わらをする。 ③通風、採光を良くする。 【参考事項】 病斑上に形成された分生子が雨水によって飛散し、葉や果実の表面で発芽して侵入する。	①次の時期に農薬を散布する。 4月下旬、春葉 (5月中旬)、夏葉 (6月中旬)、秋葉 (9月上旬) (例) イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤 (ベルコート水和剤) チオファネートメチル水和剤 (トップジンM水和剤)
ごま色斑点病 (<i>Entomosporium</i>)	①被害葉を園外に持ち出し、適切に処分する。 ②排水、通風を良くする。 ③敷わらをする。 【参考事項】 樹上の病斑及び落葉上の病斑に形成された分生子が風雨によって飛散し発病する。 台木用実生、苗木及び幼木に発生が多い。	①病勢の進展が速いため初期防除が大切であり、防除適期を失ないように農薬を散布する。 (例) チオファネートメチル水和剤 (トップジンM水和剤) ベノミル水和剤 (ベンレート水和剤)
アブラムシ類	①農薬散布を控え、天敵であるテントウムシ類、ヒラタアブ、ウスバカゲロウ、アブラバチなどの増殖を促す。 【参考事項】 ナシミドリオオアブラムシは卵、幼虫、成虫で越冬し、硬化葉に寄生する。11～5月が寄生時期である。 ユキヤナギアブラムシ、ワタアブラムシは未硬化葉に4～10月に寄生する。	①種類によって生態が異なるため、適期に農薬を散布する。 (例) アセタミプリド水溶液 (モスピラン顆粒水溶液) アラニカルブ水和剤 (オリオン水和剤 40)
ナシマルカイガラムシ (サンホーゼカイガラムシ)	①粗皮削りを行う。 【参考事項】 1～2齢幼虫で越冬し、年3回発生する。	①5月下旬～6月上旬 (第1世代1齢幼虫) に農薬を散布する。 (例) アセタミプリド水溶液 (モスピラン顆粒水溶液) (カイガラムシ類) ププロフェジン水和剤 (アブロード水和剤) (カイガラムシ類幼虫) ②8～9月に農薬を散布する。 (例) マシン油乳剤 (スピンドロン乳剤、トモノールS)
ナシヒメシンクイ	①粗皮削りを行う。 ②冬期にバンド誘殺する。 ③果実の袋掛けを行う。 【参考事項】 老齢幼虫が、がんしゅ病発病部位及び樹皮内で越冬する。年5～6回発生する。 6月中旬～下旬、7月中旬～下旬、9月中旬～下旬に発生が多い。	①収穫後、芽かき後、剪定後に農薬を散布する。 (例) カルタップ水溶液 (パダン SG 水溶液)
ミカンハダニ	①カンキツ、ナシなどから移動する 場合が多いので、周辺にこれらの果 樹を植えない。 【参考事項】 休眠しないので、卵～成虫のすべてのステージで越冬し、年間十数回発生する。 抵抗性が発達しやすいので、同一系統の殺ダニ剤の連用は避ける。	①葉の表裏にまんべんなく農薬を散布する。 (例) エトキサゾール水和剤 (バロックフロアブル) シフルメトフェン水和剤 (ダニサラバフロアブル) (ハダニ類) マシン油乳剤 (ハーベストオイル) (ハダニ類) (10～3月)